

令和2年度高齢期の幸福度に関する報告書
(平成29年度追跡調査) 【概要版】

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所

増井 幸恵

内容

1. 調査の目的	2
2. 調査の方法	2
2-1. 調査項目と手続き	2
2-2. 調査対象者および参加者	2
2-3. 調査期間	2
2-4. 倫理的配慮	2
3. 調査状況および参加者の属性	3
4. 主要変数の3年間の変化：平成28年令和1年データと平成29年令和2年データの比較	4
4-1. 幸福感の変化	4
4-2. 要介護リスク（基本チェックリスト）の3年間の変化	4
4-3. 老年的超越の変化	5
5. 幸福感の関連要因の検討および令和2年度調査結果のまとめ	6
5-1. 日中の過ごし方との関連の検討	6
5-2. 経済状況の関連の検討	7
5-3. 初回調査時の老年的超越の高さと追跡調査時の幸福感との関連	7
5-4. 令和2年度調査のまとめ	8
6. おわりに	8

1. 調査の目的

『高齢期の幸福度調査』は平成 28 年度より実施されており、市内高齢者を生物学的な面と心理的な面から調査を行い、亀岡市における有効な地域包括ケアシステムの下、幸せで健康的な高齢期を創設する為のエビデンスデータの蓄積を行うことを大きな目的としている。

ここで報告する調査は、平成 29 年度 (2017 年度) に参加した自立高齢者に対して 3 年後の追跡調査を実施したものである。今回の追跡調査においては、幸福感 (WHO5-J)、機能状態 (基本チェックリスト)、体力 (握力)、心理状態 (老年的超越) といった高齢者の基本的な状態像を示す指標に加え、それらに影響すると考えられる、日中の過ごし方や主観的な経済状況などの項目を収集した。これらのデータから、亀岡市高齢者の 3 年間の、基本的な状態像の変化および、それに関連する要因を検討する。なお、令和 2 年度は、全国的な新型コロナウイルスの流行により、当初予定していた訪問調査を実施することができず、郵送調査で追跡調査を行うこととなった。

2. 調査の方法

2-1. 調査項目と手続き

調査項目：①主観的健康感：1 項目、②精神的健康感 (幸福感) WHO5-J：5 項目、③厚生労働省 基本チェックリスト (KCL)：20 項目、④日本版老年的超越質問紙改訂版の短縮版：12 項目、⑤日中の過ごし方、⑥経済的状况、⑦地域包括支援センターの利用や認知、⑧日常的な買い物の回数、⑨日常の買い物の不便、⑩買い物支援サービスの利用、

調査方法：以上の項目をアンケート用紙としてまとめ、対象者に郵送配布し、郵送での返送を求めた。

2-2. 調査対象者および参加者

本調査の対象者は、平成 29 (2017) 年度の「高齢期の生活状況調査」に参加した自立高齢者であった。このベースライン調査においては、亀岡市に在住する 70 歳以上の自立高齢者 664 人を対象として実施し 390 人が調査に参加した。このうち、令和 2 年 7 月 1 日現在で、死亡 (5 人)、転出 (7 人)、要介護認定者 (14 人)、施設入所 (1 人) の計 27 人が令和 2 年度追跡調査の対象外となった。

これらを除いた 363 人に対して追跡調査の質問票を郵送した。その結果、質問票の返送は 265 人からあった。未返送者は 98 人であり、要支援者認定者は 7 人 (うちケアマネジャーの関りがある人 5 人、ケアマネジャーの関わりのない人 1 人)、自立者 (介護保険未申請) は 91 人であった。返送者 265 人のうち死亡 (3 人) が対象外となり、分析対象者は 262 人 (有効回答率 72.2%) となった。

2-3. 調査期間

令和 2 年 8 月 5 日 (水) ~ 9 月 4 日 (金) に実施した。

2-4. 倫理的配慮

亀岡市個人情報保護条例に基づいて実施された。調査票に対象者への調査趣旨を明記し、一読後、署名による返送をもって、同意とみなした。

3. 調査状況および参加者の属性

表 3-1-1. 年齢群別・性別の参加者数

	男性	女性	合計
70歳群	77	100	177
割合	43.5%	56.5%	100.0%
80歳群	37	45	82
割合	45.1%	54.9%	100.0%
90歳群	1	2	3
割合	33.3%	66.7%	100.0%
合計	115	147	262
割合	43.9%	56.1%	100.0%

表 3-1-1 に、年代別・性別の参加者数を示した。男女合わせて、70 歳群 177 人、80 歳群 82 人、90 歳群 3 人が参加した。平成 29 年度調査参加者に対する年齢群別の追跡率は、男性 75.7%、女性 70.3%、70 歳代 72.4%、80 歳代 75%、90 歳代 42.9%であった。

表 3-1-2. 地区別・性別の参加者数

		男性	女性	合計
亀岡地区	人数	17	11	28
	割合	60.7%	39.3%	100.0%
川東地区	人数	11	22	33
	割合	33.3%	66.7%	100.0%
西部地区	人数	15	27	42
	割合	35.7%	64.3%	100.0%
中部地区	人数	26	34	60
	割合	43.3%	56.7%	100.0%
南部地区	人数	11	14	25
	割合	44.0%	56.0%	100.0%
篠地区	人数	15	16	31
	割合	48.4%	51.6%	100.0%
つつじが丘地区	人数	20	23	43
	割合	46.5%	53.5%	100.0%
合計	人数	115	147	262
	割合	43.9%	56.1%	100.0%

次に、地域別・性別の参加者数を表 3-1-2 に示す。各地区別の平成 29 年度調査参加者の追跡率は、亀岡 87.5%、川東 64.7%、西部 70.0%、中部 69.0%、南部 89.3%、篠 62.0%、つつじヶ丘 81.1%であった。

4. 主要変数の3年間の変化：平成28年令和1年データと平成29年令和2年データの比較

この章では、初回調査と追跡調査の3年間での主要変数（幸福感、要介護リスク、年的超越）の変化について検討する。検討の際に、昨年度（令和元年度）に行った平成28年度参加者の追跡データと、今年度（令和2年度）に実施した平成29年度参加者の追跡データを比較する。

4-1. 幸福感の変化

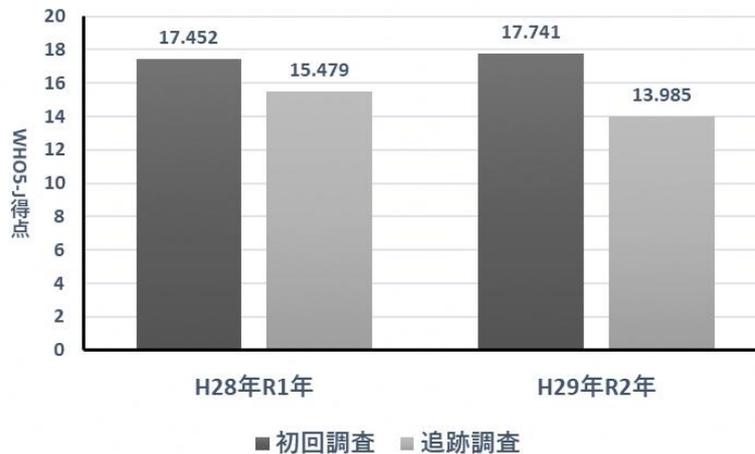


図4-1-1. H28年R1年データ、および、H29年度R2年データにおけるWHO5-J得点の3年間の変化（年齢・性別を調整）

H28年R1年データにおいても、H29年R2年データにおいても、どちらも初回調査時よりも追跡調査時の幸福感が有意に低くなっていることが示された。さらに、H28年度とR1年度よりも、H29年度とR2年度調査の方が追跡調査での幸福感の低下がより大きいことが有意に示された。

4-2. 要介護リスク（基本チェックリスト）の3年間の変化

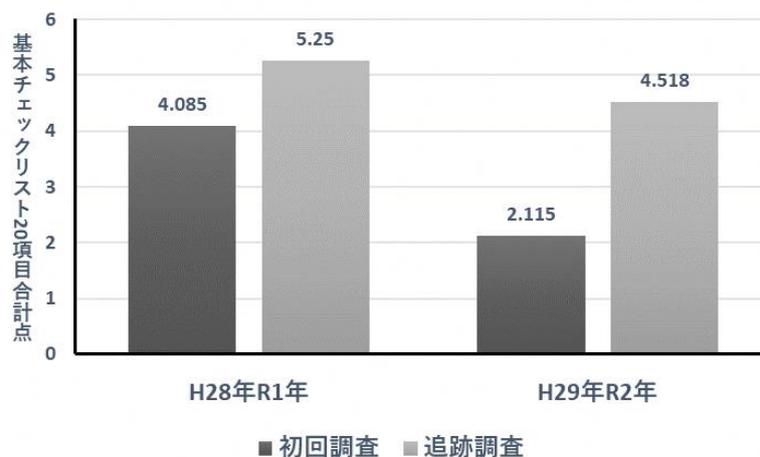


図4-2-1. H28年R1年データ、および、H29年R2年データにおける基本チェックリスト合計点の3年間の変化（年齢・性別を調整）

分散分析の結果、H28年R1年データにおいても、H29年R2年データにおいても、どちらも初回調査時よりも追跡調査時の要介護リスクが有意に高くなっていることが示された。さらに、H28年度とR1年度よりも、H29年度とR2年度調査の方が追跡調査において要介護リスクの悪化が大きいことが有意に示された。

4-3. 老年人的超越の変化

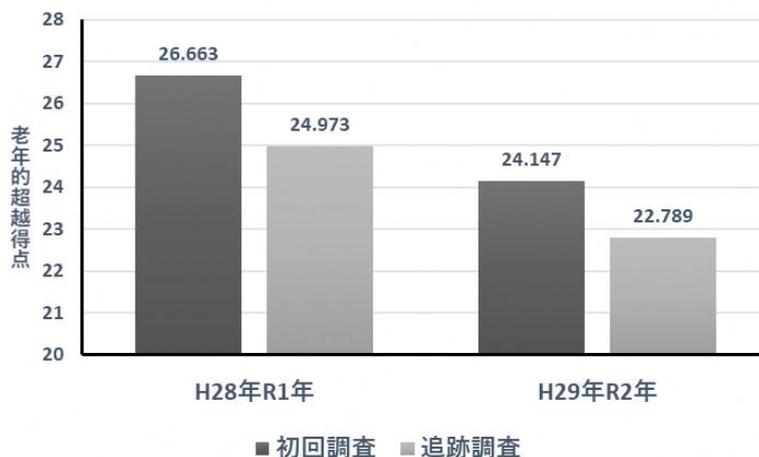


図4-3-1. H28年R1年データ、および、H29年R2年データにおける老年人的超越合計点の3年間の変化（年齢・性別を調整）

H28年R1年データにおいても、H29年R2年データにおいても、初回調査時よりも追跡調査時の老年人的超越が低くなっているように見えるが、実際には有意な差は見られなかった。一方、H28年R1年データの方がH29年R2年データよりも初回調査においても追跡調査においても老年人的超越が有意に高いことが示された。

5. 幸福感の関連要因の検討および令和2年度調査結果のまとめ

5-1. 日中の過ごし方との関連の検討

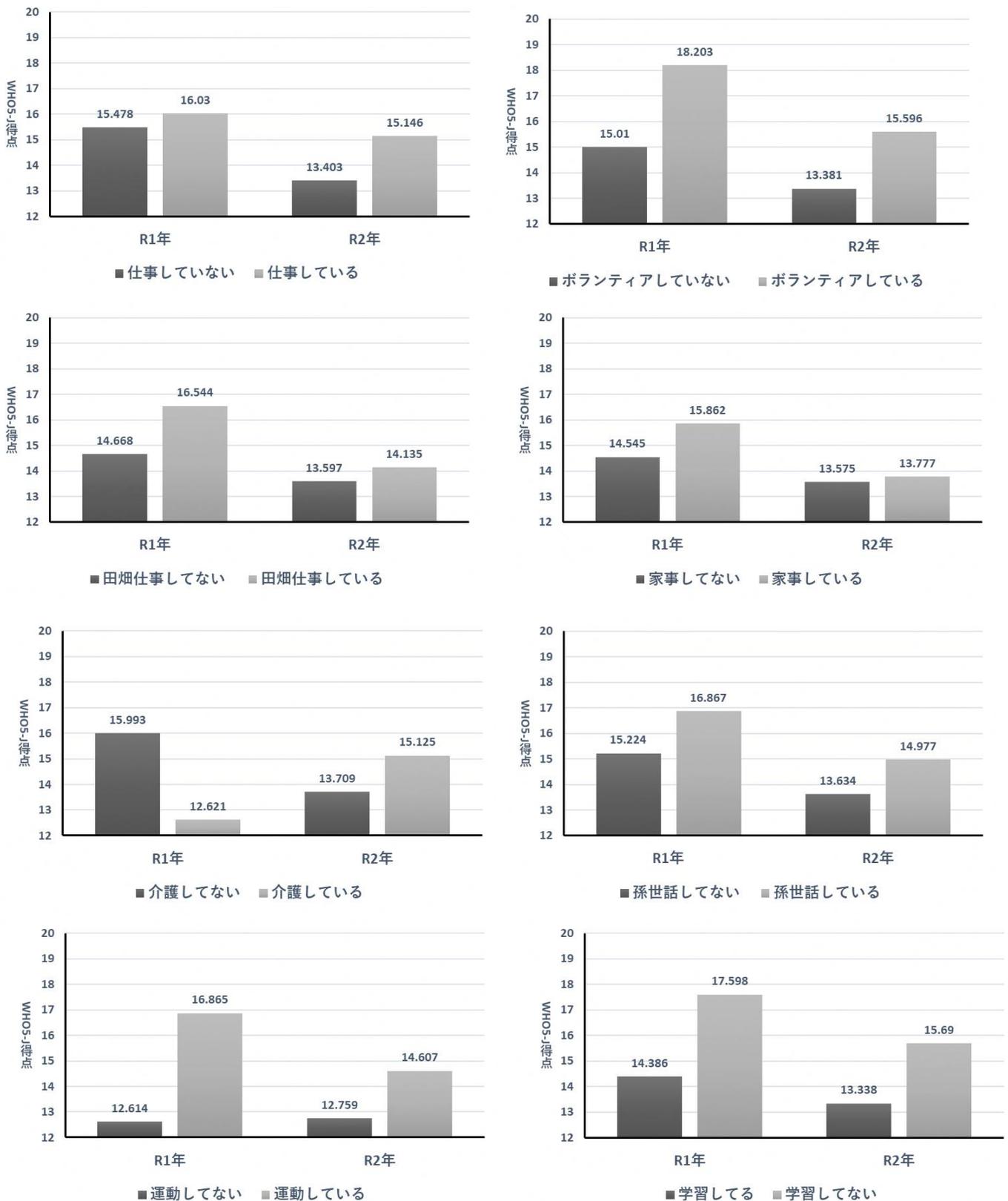


図5-1-1. R1年データおよびR2年データにおける、8つの日中の過ごし方別のWHO5-J得点
(年齢・性別を調整)

分析の結果、「収入のある仕事をしている」、「ボランティアをしている」、「田畑の仕事をしている」、「孫の世話をしている」、「運動をしている」、「学習・教養をしている」については、それぞれの過ごし方を「している」人の方が「していない」人よりも、WHO5-J 得点が有意に高いことが示された。

5-2. 経済状況の関連の検討

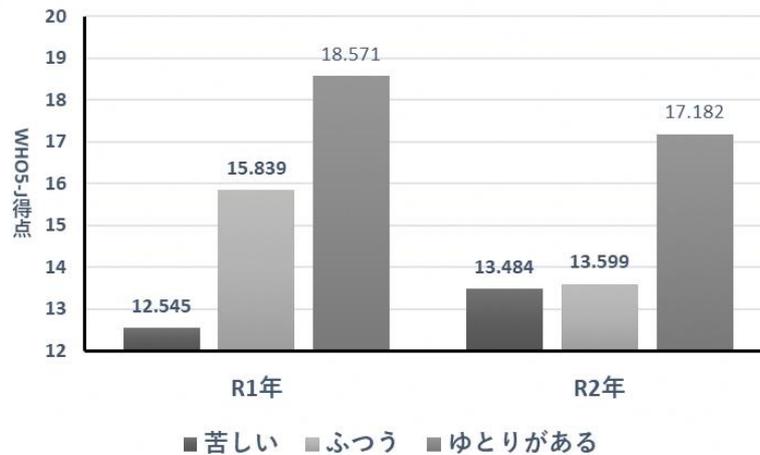


図5-2-1. R1年データおよびR2年データにおける、経済状況別のWHO5-J得点
(年齢・性別を調整)

R1年度もR2年度も経済状況がよいと評価しているほど、幸福感が高かったが、R2年では「苦しい」と「ふつう」の間に有意差が見られなかった。

5-3. 初回調査時の老年的超越の高さと追跡調査時の幸福感との関連

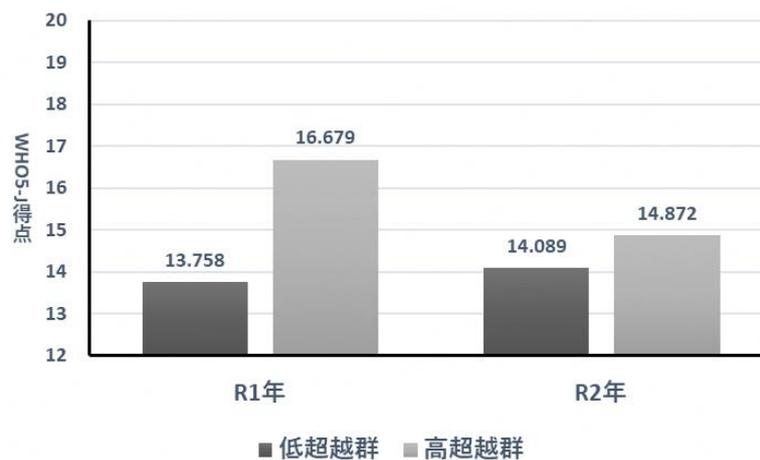


図5-3-1. R1年データおよびR2年データにおける、老年的超越の高さ別のWHO5-J得点
(年齢・性別を調整)

初回調査時の老年的超越が高い(中央値で2分割)人は、低い人よりも追跡調査時の幸福感が高いことが示された。また、初回調査時の老年的超越の高さによる追跡調査時の幸福感の違いは、R1年度よりもR2年度の方が小さいことが有意に示された。

5-4. 令和2年度調査のまとめ

①調査参加者の状況

今回の調査対象者 363 人の調査への参加者は 262 人であり、参加率は 72.7%となった。令和1年度の追跡調査では 84%の高い水準であったが、本年度は郵送調査もあり、やや参加率が低くなった。一般に、追跡調査においては、不在や拒否などで調査参加しない者は自立度の低下など状態が悪い者が多いため、得られたデータの解釈を慎重にするべきであるとされている。可能であれば、令和2年度のアンケート調査に参加しなかった自立高齢者の身体状況などを把握する簡便な調査ができるとよいであろう。

②令和1(2019)年度追跡データと令和2年度追跡データの比較

令和1年度、令和2年度どちらの調査においても、幸福感の指標である3年後のWHO5-Jの得点も、要介護リスクである基本チェックリストの得点とも悪化していた。更に、その悪化の大きさは、令和2年度の方が大きいことが示された。これらの結果は、加齢による身体状況の悪化が幸福感の低下を引き起こしているが、令和2年度の方が令和1年度よりもその悪化の状況がより悪かった可能性がある。

一方、日中の過ごし方については、令和1年度と令和2年度を比較すると、運動をしている人の割合は、令和1年度は70歳群 60.7%、80歳群 71.2%であったのに対して、令和2年度は70歳群 70.8%、80歳群 55.8%と80歳群で運動をしていない人の割合が落ち込んでいる。また、学習・教養活動をしている人も令和1年度では35~40%あったのに対して、令和2年度では20~27%と全年齢で落ち込んでおり高齢者の活動量が低下していることが示唆された。

これらの結果が示唆するものとして、新型コロナウイルスの流行による活動や行動レベルの自粛が、高齢者の要介護リスクを増加させ、その結果、幸福感の低下につながる可能性があると考えられる。令和3年度にはH30年度の参加者の追跡調査が計画されており、新型コロナウイルスの流行の状況変化により、活動や行動の実施水準が変化するか、それと関連して要介護リスクや幸福感の変化が生じるかを検討することが重要である。

③令和2年度の幸福感に影響する要因

令和1年度、令和2年度とも、年齢および性別を調整しても、日中の過ごし方（「収入のある仕事」、「ボランティア」、「田畑の仕事」、「孫の世話」、「運動」、「学習・教養」）をしている人の方がしていない人よりも幸福感が高いことが示された。上で見たように、活動を行うことで要介護リスクが減少し、幸福感の高さにつながることを示された。一方、経済状況もどちらのデータ年度においても幸福感との関連を示していたが、令和1年度では幸福感が中程度であった「ふつう」の評価者であったが、令和2年度では「ふつう」は「苦しい」と同程度であり、コロナ禍による幸福感への影響が経済状況「ふつう」層にも及んでいた可能性がある。

初回調査時の老年的超越もどちらの年度でも追跡調査時の幸福感を高める要因であることが示された。つまり、老年的超越が高い方がその後の幸福感を高く維持できる。しかし、一方で、その促進度合いは令和2年度では小さいことも示された。このことは、心理的な対処方法である老年的超越の効果は令和2年度のコロナ禍の状況においては小さい可能性を示しているのかもしれない。

6. おわりに

新型コロナウイルスの影響は、令和2年度いっぱい続き、令和3年度にもその影響を落としそうである。このような状況の中、今回示された調査結果の傾向が令和3年度も継続するのかどうかそれとも回復していくのか、令和3年度の追跡調査の結果が待たれるところである。また、本調査の結果は、亀岡市高齢者の幸福感をこのような状況の中、どう高めていけるのかについても重要な知見をもたらすことが考えられる。この点からも令和3年度の追跡調査につなげていく必要があるであろう。